

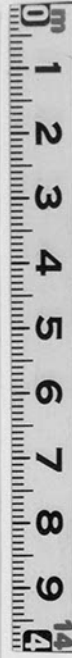
清島操

手鞠

第一号



昭和25・8・1発行



年輪

一年の 喜びや 悲しみや
 数多い 想出を記す
 年輪――

或時は 太く はつきりと
 或時は 細く ほんのりと
 一年は 一年と
 太く逞しい成長を記録する
 年輪――

x
 x
 x

友よ――

この食しい紙の上に

喜びや 悲しみや

青空の掬ふ 抱負や

白雲の掬ふ ロマンを

盛り上げよ！

それは一本の輪となり

人生の年輪となつて

日々に固く

月と共に大きく

――成長するであらう。



年輪 ―オ―号目次―

・表紙――高橋光男	・年輪――オ―号目次――
・発行を祝して	・オ―号目次――
モミに	・オ―号目次――
偶生	・オ―号目次――
詩断	・オ―号目次――
川理	・オ―号目次――
死屈	・オ―号目次――
落二	・オ―号目次――
Y想	・オ―号目次――
俳句	・オ―号目次――
色画	・オ―号目次――
土和	・オ―号目次――
平へ	・オ―号目次――
帰の	・オ―号目次――
・編集後記	・オ―号目次――
郷評	・オ―号目次――
高山	・オ―号目次――
橋本	・オ―号目次――
光	・オ―号目次――
男	・オ―号目次――
茂	・オ―号目次――
(14)	・オ―号目次――
(13)	・オ―号目次――
(12)	・オ―号目次――
(11)	・オ―号目次――
(10)	・オ―号目次――
(9)	・オ―号目次――
(8)	・オ―号目次――
(7)	・オ―号目次――
(6)	・オ―号目次――
(5)	・オ―号目次――
(4)	・オ―号目次――
(3)	・オ―号目次――
(2)	・オ―号目次――

このこと市場を開拓した主原因で、モミに関する限り何と言つても色白の好男子でなければならぬと言つことにする。

関東以西ではどういふ訳か住家に櫓枝を使ふのを、極端に嫌う風習がある。これは棺槨は主として櫓枝で造ることから縁起を担いだものと思ふが、当地方では左程でもない様だ。と言つのはモミの純白な紅の天井板などを、時々受けることがあるからだ。また昔から櫓枝は腐らぬといわれて、土蔵用材とか棺材に使用されてゐる。何と言つても色白いのを喜ぶとすて、輸出向の製函材、天井板の他特殊材として、蒲鉾の腰板、おれやれに担ぐ人には何とも申訳ないが、棺槨、卒塔婆等ばかり、白きが故に用途が広いものである。話が横道へそれだが、石城嶺の名を高めよう一つの理由がある。それは昔から石城嶺の生産業者が、市場開拓のためにお互ひに競つて、木取に工夫をこらし品専区分を露送して、市場の好感と信用を獲得した賜で、その点生産業者に敬意を表する次第である。

と言つても現在の業者より早まつてはいけぬ、それは木枝の統制される以前の話で、現在では又つてこの点で折角の名声も、也を弘むたる感がある。甚だ遺憾ではあるが先輩が永年の努力に及ぶ功績を、けがす勿れだ。

次号へ続く



凡 人 生

偶考

とかく戦時中は文、学友とを口にすれば、有閑人の非戦争協力者として周囲より白眼視されたと、一旦終戦と成ると澎湃として文学に對する関心が高まり、店頭に陳列された其の種の雑誌さへ十指に

余るものがあつた。その原因を探究するに、戦時中の抑圧の反動と、いかに我々人生にとつて文学そのものが切り高し得ないものであるかが伺はれる。しかし文学とはいかなるものであるか。鮮り切つて言ひ表し得ない模範たる状態にあるようであるが、何とかその定義をつけたいと思ふ。

先づ言葉を引いて見ると「人の思想・感情、を文章によつて表現し、人の感情に訴へるのを主とした美的作品即ち詩歌、小説、戯曲又文学批評の類なり」とある。即ち人間の感情に訴へる美的作品を指すのである。それならば文学による記述以前の文学、例へば神話、伝説、童話、民謡等所謂口頭のもののが無視せらるゝことになり、更に「話される言葉」による文学的表現、例へば文芸講演や演劇の台詞がオミットされることになる。従つて字典にある文学による表現は「言語による」と書き換へなければいけない。即ち文学を「言語芸術」と言つてよいではないか。それでは文学とは、作品を指

なことがあつた。

初刊にあたり投稿をと種々忠告に迷わされ、つい或る日の記した一節を書いて見ようと思つた。

どんな方法でもよいだらう。

自己を集中しようとするれば、する程、私は自己が何のの上に浮いてゐる様に感じさせられる。一体何の上だらうか？ それは虚無の上にとつてほかない。私は虚無の中の一つの点である。

この点は限りなく縮小されることができる。

しかしそれはどこまでも小さくやつても、自己がその中に浮き上つてゐる虚無と一つのものではない。

生命は虚無でなく、虚無はむしろ人限の条件であるだらう。けれどもこの条件は恰も一つの波、一つの泡沫でさいもが波といつてもを連れて思慮されぬ様に人間が考へしれぬものである。

人生の条件としては他の無數のものが考へられるであらう。例へばこの部屋、この机、この書籍、全体の自然或は家族、そして全体の社会、世界と——

いくつもの言葉で表わされたものは、更に無數の要素に分解することが可能であらう。

この無數の要素は互に關係してゐるだらう。人間といふものは、その身体、その精神、もそれらの要素と同じ秩序のものに限りなく分解することが可能である。それ故一つの細胞にとつて他のすべての細胞は条件であり、一つの心象にとつて他のすべての心象は条件である筈である。



人生の条件

辺 堂 完 治
私達の待望した機関紙が発刊されるとの事、かゝる有難義

断面

もり・くさを

立木の断面は悲しい——
いつまでも、尸史が
生々と、肌に喰ひ入り
悲しい記録が、しびつて
古い想出が
渦とまつて、巻いている——。

掘割の断面

尸史が 次々と堆積して
沈黙が 固く凝結してある——。

足跡

又 つ 左

町と、村をつなぐ、一本道。
この埃の多い道には、
多くの足跡が、残っている。
靴の跡、下駄の跡。
そして荷車の跡、
柔かな土の上には、
犬の足跡までついている。

悲しみを心に抱き
とほくと歩いて行つた者。
袂に、胸を奥かせた、
歩いて行つた者。

青い屋根の下で、
はちきれそうな幸福を
語りつゝ通つた。若い男が。

こんな事を、黙つて考へつゝ、
嫌のやうに歩いている。僕——。
そのあとを振り返つて見れば、
やはり僕の足音が、
奥道についている。

唯も知らない、想を秘めて、
無数の足跡を抱いている。
埃だらけの、この白い道。

川柳

破 札 笠

黒い顔岩で林道敷へけり
木馬ひきあと押しのある子浪山
変形の徑級槽して進枝夫
検知補助空間引きで一歩くし
二尺五分ちよつとおかしいが三等にシ
引渡し歌に合せてボンコッソ
つり天狗あげたを見ればドンコなり
難言に一役買つてるキヤンデー屋

屁理屈

一一 題



丁。 Y.

一、希望

希望のない生活は、空虚であり、暗黒である。希望のない
生活は、生命の躍動がない。

人生の幸福は、希望に向つて努力する者へのみ与へられ、
前途に希望を懷き、それを獲得すべく努力する生活こそ、最
も緊張した生甲斐のある生活である。一つの希望の達成は喜
であり、更に新しい希望を肩つことは幸福である。希望には
大小がある。もとより吾々の希望は大なる事を妨げないので
あるが、然し一生涯の大願といふが如き渺然とした希望を懷
く事は、殆んど空想を夢みるに変わりない。凡人は、出来難
い事を歎くが、出来易い事を仕掛とはしないものである。
実現の可能に乏しい遠大な希望を懷くよりも、寧ろ確實
にして手近く求め得られる希望を持ちたいものである。

一つの希望が達せられたら、更に新しい希望を設け、次か
ら次へと目的を達して行くがよいと思ふ。かくて終には大なる
事が成し遂げられるのである。人には運、不運あり、時に
利、不利がある。例へ中道に於て多少の幸運を生じて、決
して悲観してはいけない。屈せず、撓まず、七転び八起きの

覚悟が大切である。希望のある処、最後には必ず目的が達せ
られる。

二、天分に生きよ

鉛が鉄にならぬように、人の天分も変えられぬ。鉛は鉛で
よい、鉛でなければならぬ用途に、鉛を使へば、銀はおろか
、白金にもまさる。人の価値も同じことで、持て生れた天分
は、その人独自の尊さがある。だからむやみにひとと比べる
ものでない。

鉛を銀にしようなど、つまらぬ野心を起さずに、鉛の本姓
を發揮する事だ。のらくらものゝわれくも、自分の天分さ
へ伸ばせば良い。

「唯のやうに——」等と思わぬこと。自分だけの天分を、自
分の力一杯に伸すことだ。

それには中途半端は禁物だ。命がけで精進する習慣を、昔
断から養つて、自信の持てる人間に仕立てることだ。鉛に銀
メッキの様な人間にせぬ事だ。メッキで済まされるこの世で
ない。地金のまゝで徹底する処に、生甲斐のあるこの世だ。
天分を喪失なほせずに、最上の天分に伸すことだ。かけがへ
のない天分にまで生きぬく事だ。

●落日に想ふ●



丁子

お勤めを終えて帰路についた残る日の黄昏、今迄見た事のない、実に美しい落日を見る事が出来た。極く重たげな雲に、切れ目が出来て、そこから光線が尾を引いていました。そして彼方には素晴しく面赤に燃えた、沈みゆく太陽と共に、地上のあらゆるものは森の陰にかくれて行こうとして居りました。

それは数分には満ち溢れた素晴らしい景色でした。この雄大な麗々大自然に暮しました時、私は考へました。あ、こうして月日は去り、星は移り、私は一歩々々死に近づいて行くのだと。そしてたつた今迄の自分の道を静かに省みると、何故か自分の心が、だん／＼不気味なものに変わって来るのです。自分の体当の姿を、真実の明るみに引出して、冷酷な検討を加へて見て、初めて或る程を得、心に平安が満ちるという事は、自分の歩んで来た経路を通して悟る事が出来た筈なのに――。

その時私の脳裏に、「疾き門より入れ。滅びに至る門は大さく。其の道に至る門は狭し」という聖書の一句と、「苦し

みを避け、悲しみを逃れるという事は、人の心の住む世界、未だ唯も望んだことのない、広い／＼楽しい心の世界を、魔の道の長さに疲れて頂をきわめずして逃れ去る人の事である」という或本の一節がからめいたのでした。そうです。この世界はたわむれではない、單に経験の谷ではない。又より良き世界への、うつり変りだけでもない。この一瞬、この一日、この世界自体が、永遠の世界の一つであり、そして私達は一緒に住んでいる人々のため、又自分のあとに住むであらう人々のために、この度果てた荒野を美しく、一層美しいものにしなければならぬ。それだけでよく、神の御恩を私達凡人の努力に依つてする事が出来るのです。つまり私達は、御探理によつて与えられた境涯にあつて、そこにある材料で自分を築き、平和にする事に努め、悪に傾き易い自分に鞭打ちつつ、清く生き抜く生活の中にこそ、靈魂の平安があると思ひ、冷い理性を以て真理の探求に、最後迄、死ぬまで努力しよう――と。その時決意を新にしたのでした。愚痴とか不平とか先には戻りがちな人生に於ては、良く忍耐して面の幸福を求めて、強く生きよう。私は生きています。そして若い無能な私にとつて、それの心が最大の心のオアシスです。若き故に苦しむ私は、大自然を友とし、この世の凡ゆる事を心の糧として、輝かしい未来に、高い理想と、美しい夢、大らかなる希望を抱いて生きてまいらう。

夕陽の迫る田園道を、家へ急ぐ足どりは何時か軽く、歡喜の涙にぬれた眼には、夜のとほりのお初めようとしてゐる夕まやの中に、阿武隈の山脈が遠くかすんでをりました。

Yさんへ

「文化について」

R・丁子

お手紙が届く御座いました。

在Kのことを想ひ起せば、あの湯煙の詩的な湯煙と共に、中学校での地協発会式の事や、蒸気郵便局での森島雲の事や、国鉄の、人民整理対策の運動等、沢／＼と想ひ浮んで来ます。そしてK町を去る私を、見送つて呉れるかの様に、美しく山々に映えた紅葉が鮮やかに冠ひ浮んで来ます。

さて山と海、という形容の通り、海辺のこぢん／＼に來て、今更乍らK町の非文化性を、し／＼／＼痛感しました。水道、ガス、舗装路、新しい映画。そして生活面では、生で喰べても良い様に新鮮な魚類。冬でも一寸暖うことの出来る野米。必需の時、湯気の立つものを暖か事か出来る配給パン等々、例へその極限は同じであつても、生活へのプロセスの大きな事に、目を見はります。

K町に居る境、私は良く冗談に、K町の文化は竹と木だ、といったものです。水を引く竹樋と湯を引く木樋。それが端的にK町の文化を象徴しては居ないでせうか。おそ／＼瀧川時代の文化でもある竹と、木の輪送具や、K、昭和の今迄受けつがれてゐるという事は、何という時代錯誤でせうか。(この事について、私は最近平凡な、けれど大変印象深い体

験をしました。それは私の家の台所に板戸が入つてゐるので、すが、その海に書面でも電報を使わないと、暗くて仕事が出来ない状態でしたが、ある日それをガラス戸に取換えた途端に、煌々たる陽光が射し込んで、夕方迄電気が必要が無くなくなりました。

これが文化というものゝ家庭に於ける地位ではないでせうか。文化というと、直ちに映画や、文学や、音楽、と考へる前に、もつと身近な、例へば毎日使う鉛筆一本の良、不良にも、文化があるという事、それを高める事によつて仕事に向ふ上、生活が豊かになるという事に気が付かねばならぬと思ひました。

それは一見、繁沢の様に見え、又思ふ人があるかも知れませんが、それは一時の出発であつて、刻一刻眼に見えない精神の面で、或は、仕事の能率によつて回収している事を知らねばなりません。繁沢と文化、それはさし／＼と儼然、或は繁沢と天々の様に似て非なる事を痛感します。長々とつまらぬことを失礼しました。(右客)

俳句

朝 草

一 眼

流

乙せうし朝草眞ひし手に一輪
道標の如くに白百合あざやかに
雨あがり城の音聴しき夜更かに
田も穂えてひと先ず顔の豊夫説
はなれ映して見よう湧き清水
種くさき胡瓜のつちに毒の味

・ネクタイ・

近頃、どの店にもぶら下つて
いる、けぼしいネクタイは、
やはりアメリカン、スタイルと
もいふのであらうか。

水色の地に、黄や、褐色の二つ
模様が、どうもあまり日本人には
向かない様である。あゝいう色は
、おそらく一年中緑一色のハワイ
とか、南方の様な所で考へられ、
又適合するものではないだらうか。

・菜の種・

たまごう、菜の花が又のつて、
どの畑にも黄とも、紫とも、青と
も、褐色ともつかない、複雑な色
で繁つてゐる様は、幽玄とでもい
うか、趣のある、日本的な色彩で
あると思つた。

・テクニカラー・

色



外国の色彩映画に刺激されて、
去る国会で、色彩映画製作補助策
が提出されたとか、監督の鬼木
下重介が、今度色彩映画を作ると
か、と、大分色彩映画への観心が
高まつて来た様である。

大体日本人は、名工柿石工門が
、陶器に柿の色を出そうと苦心慘
胆したというエピソードの様に、
昔から色というものに秀れた感覚
があつた様である。

・女性・

夏になると、女性が城に魅力的
に変わるものである。

茲ものを述べてほの見える肌の
色、或は腕や胸の、適当な露出は
人生の愉しさを、美しさを教へる
季節の正口チンムである。

知々の肌を、
すい溜の肌、と表現した文士は、
たしか、モパッサンであつたら
うか。

(編集部)

映画

評



吾れ幼の
魚を見た

出 伊藤 大輔
主 大河内伝次郎
小 夜 福子
一生に亘る、伝記ドラマである
だけに、シナリオ、演出共に苦心
の跡が見える。

物語の説明に、度々サス、タイ
トルやアフター、レコーディング
を用いては、何とか之を、画
面で表現する方法はなかつたであ
らうか。子供の戦死と、カバチエ
ツボの発見による夫婦喧嘩のシー
ンは、あまり芝居がかつて、玉に
瑕のきらいがあつた。

全体にあまり直剣に取組みすぎ
た様だ。今少し流れが整い。主
人は針、妻は糸で、主人のいう事
、仕度い事には否応はないという
世の考へ方——それはその頃の世

若草物語

性のモラルであつたうか。現代
の人は何と考へる事であらうか。

虚栄心が強く、優しい長サメス。
小説家志望のお頼理娘シヨウ。
絵が上手で気取りやのエミール。内
気な病弱のベス。この四姉妹の、
個性が濃く、物語は、原作とシ
ナリオの良さと共に、演出の素晴
しさに、軽い上品なユーモアと、
ヒューマンな感動をたゞへて、見
る者をぐい／＼と最後迄引きつ
けて置きたい。

この映画を見て、人間の尊厳と、
人生の愉しさを感ぜたいものは
無いであらう。

全篇に、度々用ひられた、ロマ
ンチックな、幽雅なメロデーは、
この物語に相応しい効果を挙げて
いた。(草)

細雪を観て

はやなぎ

文壇を賑わした細雪の映画化だ
けあつて、力強い企画とは、う
なすけるが、しかし矢張り期待は
すれの感が深い。

結局、此の映画の最大要素であ
る詩的リズムというものに、あま
りにも、とられ過ぎたためであ
らう。詩的資料豊富にと思つて織
込んだ多彩さが、かへつて詩律を
削減し、詮索を弄しすぎた結果と
して、人工化された自然色の線を
強くして仕舞つた。折角豪華な配
役を擁して、いかんせん、スタ
ッフ陣に肝心の「情操」というも
のが足らなかつた為、谷崎調の
真髓ともいへば詩的旋律が殆ん
どつかわれなかつた。

全体として受ける感じは「情緒
」という原色から遊離した、いわ
ば「キレイ」とか、派手やか、と
いつたフワ／＼した色彩に御惑さ

れる。端的に言つて華美という感じの方が強かるう。

結局二時間十分の長尺ものも骨董、衣裳の陳列が、京阪神の名所案内に由る結果に終つてゐる。

妙くとも、情緒豊かであるべき細雪も、あれでは「アラレ」か、「ヒヨ」の味気なさ、および細雪の実感には程遠い極だ。むしろ、「新開家の姉妹」とでもした方がよい。

本来文学では表現困難な詩的描写を多彩に筆致して、尚且自然の迫力と劇中人物をマツチさせ、人間性の情熱を描くことは、さまで至難ではないが（通俗小説の映画化はいざ知らず）およそ肉感的リズムに富んだ自然派文学の映画表現といふものは、限られたスクリーンでの一騎一騎では容易に其の効果を挙げ得ないものの極である。松竹にしろ、大映にしろ、此の種の作品は、多くは失敗を喫している。映画技術に於ても舊同じ東宝

が扱つた漱石の「虞美人草」当時の技法に比べ依然として五十歩、百歩。未だ濫々として時代進歩の路が見られない。

配役では、何れもレギュラーだけあつて、三人とも無難な演技と言へるし、助演の「ケイボン」役も光つてゐる。四人姉妹の主人公役の妙子（高峰）に多くの筆が費やされるのは当然であらう。肝心の雪子の物語が中途半端に終つてゐるのも大カシイが、スゲールの長い山根を配し乍ら、ものも言へない、ひかえめな女に終始させたのは室の持腐れというもの。あたら適役を殺して仕舞つてゐる。

長味の鶴子（花井）はミス・キヤストで無用の長物、しかしこれも役柄止むを得ないのかも知れない。妙子の恋人に扮した板倉（田崎）には迫力が欠けてゐる。暗室での劇的シーンや、病床の場面も平凡で妙子の高峰のリードに圧倒されてゐる。もう少し演技に中と愛

化が欲しい。

風水害の猛威に抗して（坂倉水）恐怖におののく（妙子）人命救助の大切な描写を刀ツツして仕舞つたのは大きなミスだ。そしてこの勇抱を高峰独りに荷負して、生々しい死の恐怖の深刻な追想として物語らせてゐるが、これは全く愚の極である。たしかに此頃の描写は難点であらう。しかし映画化するなら斯うした肝心なポイントこそ是非克服して貰いたいと思ふ。この場面を繰返したらもう一つと、細雪の真価がクローズアップされたに相違ない。

この映画の特色として注目される点は、言葉の配りである。関西人なら殊勝らしい感興も湧くうが一般には、不可解難達な方言だけに、相当価値感を感じない。原作のテーマを否定する様なものがあつたが標準語のセリフだったから、或はもう少し興奮と感銘が多かたかも知れない。

土筆

春の野原に、ポツリンと音だけ出して、あちう、こちうを眺め通して春の訪れを告げる土筆は、陽炎と共に朗らかに純情で、又愛嬌ある姿である。

吾々山官が日頃自然を友として生活し、人心煮んだ現世間に、此の極々純心そのまゝ姿をうつぶさに観察できる事は、幸福の一つといふべきである。

だが土筆は太した役に立つ事でもなく、だからといってそのまゝはかき生涯を終へるかと思へば、唯一つ子供達のまゝごと適ひに大分もてはやされ、重宝がられるのが精一ぱいの極だ。――が前述の如く吾々自然を愛好する人間から眺め察されるのが土筆にとつては最上の幸福であり又眺める者にも何を眺めくのであるから、お互ひに幸福感を味へられるのだ。故に僕は春の声を耳にすれば、この土筆を一本とつて来て眺めて居るのが大好きである。

眺める事も新鮮なる希望に胸あふるゝ役に、土筆、アスレチックの世にこの様な小さな中にも生命力と共に幸福を輪めてゐる可愛らしい、そして雄々しき土筆。

土筆よ！早く大きくなれ、奇麗な花は咲かなくとも良いのだ。唯、世に春の訪れを知らせて呉れるものの一つというだけであつて良いのだ。そして土筆は、ロマンチックに、幸福に

生涯を過ぐせば良いのだ。眺める者と共に――。（光）

平和への希望

―― 山 本 茂 ――

それは私達の希望であり、亦そつた世界を作りたいものです。しかし此の私達の望みも夢の如く消え去つてしまひそうです。

この時にどうしても平和について過去（大戦）五年間の歩み左ふり及つてゐる必要もありませう。一が、しかし、その事はさて置きまして、題名に關し私の現状考へて居りますことを少しく述べさせて頂き諸兄姉の協明な御判断高評の程をおねがい致します。

さて人間には自然を愛する心があるのになぜ相対する人をお互ひに愛し盡すことが出来ぬのでせうか。

血交どの敵を唯が怒してするのでせう。平和のためのギセイだともいわれ居りますが、ギセイはもうたくさんです。私達の願つてゐる平和とはギセイの矢い平和であります。ギセイによる平和な平和としての成立を認めることは出来ないものと思われまふ。

以上のやうな事に対し、理想であり実現には程遠い事だといわれる方もありますが、しかし、それがいつて其のまゝにはじたくない。否しやうしたなら今後幾万人かの人がギセイとなつて行くこととせう。故に平和そのものに相反することと断られまふ。

粗達、地球上のすべての人が本心に平和を維持し、平

和を愛し、そして平和のために、努められる様に祈りたいものです。

神イエスが言え給われし誠命に、「おのれの如く此の臨人を愛すべし」というのがありますが、愛する心こそ本当に和やかな世を作ることが出来まじうし、そうしてこそ真の平和への大道を達することの出来るものと思ひます。又さう言つた平和こそは私達の布う平和ではないでせうか。——朝鮮動乱悪化の一途をたどりつゝある日に

「歸郷」

高橋 光男

山の夕陽は美しい。僕を來せし馬車は今その夕陽の中を、伯母さんの家へ向つて走つて居る。ホコリ／＼という蹄の響きに和して取巻の吹く笛の音が、山間の村を幾つも越えた。夢寐庵をかぶり笛に手拭を巻いた郵便屋が過ぎる。裸馬に乘つて野良から帰る百姓。数珠の唄りらしい村の乙女連四、五人が風呂敷包を抱へて来しやうに話をし乍ら行つた。夕陽は次第に遠山の彼方に沈まつてゐる。夕煙雲がキラ／＼光つて木々に反射し、なんともいへない景色である。去丘も今日みだいな、この景色の中を疾走す夕陽を背に受けて胸を炙かせ乍ら行つたのだ。その時と何ら変わる处も見られず、懐しさがあふれて来る。当時の想ひ出が走馬

編集後記

向しる当番としては、初めての事なので、どうかと気付けられたが、予想外の良い原稿が集まつた事は嬉しい。

公私共に御多忙な中から、署長の寄稿を得た事は、感謝に耐へないと共に、機関紙に対する深い認識に対して感銘する。

生名生の「モシ」については、その觀察、表現、誠に含蓄深く、ユーモアに溢れ、諷刺に満ちた好讀物である。次号を期待しよう。

局のついでに、上品でしかも教養になる魂のパンの様な機関紙。そんな意味でバラエティーに富んだ編集とした。御批判と共に、数多い次号の御投稿をお願する。

今回、寄稿者は次の通りです。御協力を深謝します。勅使河原美則、都築辰吉、山下敬夫、鳥居連蔵、伊藤虎一郎、渡辺留記、込野島治、山本茂、高橋光男、近藤孝子、折笠辰男

灯の如く点滅するうちに、馬車は静かに走つてゆく。

「お婆さん！もうすぐですがよ。支度が良いですすがない、懐か出を回顧していたが取巻の手に気がつき、急いで用意を始めた。遠くには夕陽の残照の殿の中に家々の屋根が浮んで見える。「ホリヤー」と取巻の太い声と共に轡の音も流れて行つた。それと共に一段と速力を早めた。従姉弟達が楽しく待つて居る親の彼方の家へと。

家では、種々と用意して待ちあぐんでゐた。Y子さんとその下の丁子は、山羊の草刈に行つて居なかつた。もう帰つて来るだらうから、ホコリでも落したという伯母さんの言葉に、早速黄昏の広い庭の隅にある野風呂に飛び込む。

栗色にとけたお湯の面。其処には青々とした木の葉が、二枚ゆるく波紋を画いて浮んでゐる。涼風がそよ吹くとそれと共に、そいつと僕の肩の辺りに寄つて来る。母の故郷の野風呂も今は一年振りで、そつと手拭を浸して見た。何とも言へぬ柔かい感じと共に、昔くさい匂がつくと鼻をつく。僕はすつぱりと肩までつかると、しみる／＼とした気持ちで頭の上を振仰いで見た。すると其処には長いヘチマの葉が僕の遠い懐しい懐か出をそよる様に幾つも下つてゐる。——野風呂、ヘチマ——そのいい知れぬ野趣に、陶然としてゐると、あつ／＼光男さん、暫くたつたわね、今日は来ないかしらと思つてがっかりしていたのよ、という華利りから帰つた二人の声に、はつとして舌に還り、今迄に限り自然の風趣を味つてゐたが、それは、瞬く間に消え去つてしまつた。

祝 発 刊

川 長谷川浩太郎
白川屋材木店

三 佐藤武久
佐藤木成株式会社

中 芹澤政資
芹沢材木店

一 滝口 豊
丸一材木店

昭和二十五年七月二十八日印刷
昭和二十五年八月一日発行
年 輪 才一男

発行 編集責任者 鳥居連蔵
平宮林響 リクリエーション部

祝 発 刊

株式会社 丸 ぼん

平市三丁目

平市五丁目六番地

久 諸橋合名会社

平市駅前

壽百貨店 楽器部
高野 岩 夫

平市銀座通り

藤越 書籍部
佐藤 孝之助

平市二丁目

キクヤ 楽器店
加藤 忠之

事務用品・文房具一般

木村 浩

平市四軒町一八

前橋市岩神町三三二

東部建設株式会社
相沢 平 悟

平市三丁目

田中力メラ店